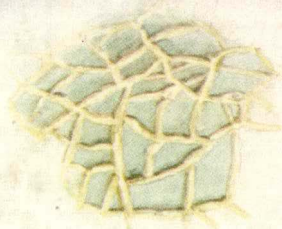


喪失

福田章二



喪失



福田章二

中央公論社

喪失

©一九七〇年 検印廃止

定価四八〇円

昭和四十五年五月三十日 初版
昭和四十五年八月三日 五版

著者 福田 章二

発行者 山越 豊

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六二)五九二一(代)

本文整版印刷 三晃印刷
カバー・扉 大熊整美堂
製本 小泉製本

目次

蝶をちぎった男の話

喪失

封印は花やかに

旧版あとがき

新版あとがき

Ⅰ

31

97

254

257

装幀 安野光雅

蝶をちぎった男の話

I

私の叔母は私達一族の、殊に私達若い連中の憧れの中心だった。彼女は五年程前に夫を失くした。もう三十六歳になるけれど、子供を持たなかったせいなのだろうか、その少し疲れたような無関心な優しさに、少女のような眩ゆい大胆さと突然の無邪気さが花やかに交錯していて、私達の単純な思慕を金色のなれあいの糸で結びつけさせていた。ほっそりとしなやかで華奢なからだつき、素晴らしい輝きを見せる大きなぬれた目、繊細に顫える情熱的な鼻腔と、しっとりとした可愛らしい唇。そしてその全てが見事に調和した深い陰翳を持つ形のよい顔は、その微かに赤味を帯びた柔らかく渦巻く髪の毛に縁どられて匂やかな絵のように私達を魅了した。そして彼女のどこかもの憂そうで少し淫らな倦怠と、その突然の無邪気さや優しい気紛れ……私達は折あるごとく彼女の許に集まってきた。

私達はそれ迄何度となく彼女の若かった頃の魅力について、そして彼女を求めて群がった大勢

の崇拜者達のことを、祖父母を初めとする一族のものから或いは知合いの人々から聞かされていた。そして私達は、今もなお時々高価なお菓子などを持って彼女の許を訪れてくる立派な紳士達を、誇りと微かな不安とを抱いて眺めていた。女が私達の倍程の年になってもまだ贈物を持って訪問してくれる立派な男を持っているということは、私達の未熟な想像力を花やかに駆け廻らせたから。私は部屋の隅に坐つて息をひそめてこれらの訪問者をじっと見守りながら、彼女の優しく無関心な倦怠から明るい微笑を抜き出す男を、不安と警戒とそして憎しみをこめて見つめた。何故なら私は彼女を心から慕っていたから。そして彼女の私に対する共犯者の親しみに充ちた優しさは、私の思慕を恋の豊かさにも導いていたから。

でも私は、彼女と私とを結ぶこの素晴らしい共犯者の親しみをどう説明したらよいのだろう。私達が彼女の魅力について目を輝かせて低い声で囁き合う時、小さいいところ達は彼女の顔や肢体の美しさをあげ、少し大きな連中は彼女の低く柔らかな声やそのどこかもの憂げで投げやりなところと少女のあどけなさが雑まじった不思議に優美な雰囲気いふもをあげたりした。でも私は、私の血にもあるこの性質、小さな生物いふも殊に蝶に対する異様な程の残忍さこそ、この素晴らしい叔母の一番の魅力であると信じるのだ。

私がまだ小さい時から、彼女はみんなのいる部屋に蝶とか蜂とかが翔とび入ってくると急に目を

輝かせて、

「あら、早く殺して……………」

と無邪気に叫ぶのだった。

そういう時はいつも私が殺した。私の目も輝いていたに違いない。私は若い獣のようにすばしく蝶を追うと見事につかまえて頬笑みのうちに殺すのだった。そして私は、そんな私をじっと見守っている彼女が、その繊細な鼻腔を顫わせて大きく柔らかに息づきながら頬笑む時、どんな時よりも美しい魅力に充ちた彼女を見つけるのだった。

私は今迄にも何度となく彼女が庭の手入れをしながら蝶をつかまえるのを見た。彼女はつかまえた蝶を暫く見つめていたあとで、やがて少女のようにあどけなく頬笑むと美しい蝶の翅を細い指先でつまんで左右に優しく引張るのだった。蝶は花片のように散った。彼女は大きく息をするのだった。いつもそうだった。

Ⅱ

或る五月のよく晴れた日曜の朝だった。私は白い薄いスウェーターに軽いラバーソールの靴をはいて、新らしく買ったばかりのレコードと詩集とを抱えて叔母の家に出かけた。

叔母の家に行く途中には、かなり大きくて草や木々や花々に溢れた公園があった。私は、私の

新らしいレコードの旋律を口笛で真似しながら、五月の朝の輝かしい太陽と空を花やかに映している、緑も濃くなった公園を軽やかに歩いて行った。前夜降った雨のために土も木々の葉も花々も、そして日光や空気までが瑞々しく濡れていて、あちこちに咲き開いたつつじの花の色が妙になまめかしかった。

暫く歩いていくと、私は一匹の蝶が私の前を翔んでいくのを見つけた。五月にしては随分大きなそのアゲハは、翅が湿ってでもいるかのようにゆっくりと翔んでいた。

私は追いかけて行った。蝶は直ぐつかまった。

私は緑の木々に囲まれた爽やかな空気と柔らかく透きとおった日光の中に浮かんのように立ったまま蝶を眺めた。天然の天鵝絨のように柔らかく繊細な黒と黄の美しい模様と、古代の陶器のあの豊かな光を貯えた肌を一瞬に凝縮したような碧と緑と紅に輝く斑点、そしてその小さな宝石のような二つの目。私は頬笑んだ。そしてその上私はその時背後に視線を感じたのだ。じっと私を見守る輝いた美しい目を、大きく柔らかい息づかいを……。私は、私の何よりも大事な私の叔母のその密やかに息を殺した気配を、そしてその期待にふくらんだ薔薇の蕾のように匂やかな鼻腔とその期待に輝く目を感じたのだった。

私は両手の指の先で蝶の左右の翅を持つとぐっと引張った。先ずその胴体がスーッと柔らかい

地面に落ち、次いで翅がヒラヒラと四枚に分れて散った。

私がこの時ほんとうに背後に視線と息づかいを感じたのか、或いはただ蝶をつかまえたことからの連想によって私を見守る彼女を思い浮かべたのかはなんとも言えない。でもとにかく、もし私がいかに背後に視線と息づかいを感じたとしても、それは大して強いものではなかったに違いないのだ。何故なら私は、蝶の翅が黒い土の上に吸いこまれるように散って落ちたのを見届けると、再び陽気に口笛を吹きながら歩き出したのだから。

だが私が二、三步歩いた時、私はうしろの方から呼止められたように思った。私は立止ってうしろを振向いた。

左手の大きなつじの繁りの蔭から一人の男が現れた。痩せて背の高い四十前後の上品な男で、海老茶のアスコットタイをのぞかせた白いワイシャツの上に薄茶のカーディガンをつけ焦茶のズボンをはいていた。

彼が初めなんと言ったのか私は覚えていない。だが彼は何か言いながら私の方に少し臆病そうなどいってもよい程静かに近づいてくると、私の顔をそして目をじっと覗きこんだ。私は彼の熱を持ったようにうるんで光っている目とその大きな息づかいに思わず目ばたきしながら、彼は私が蝶を殺すところを見ていたに違いないと考えた。

彼は暫くじっと私を見つめていたが、急にその目は怯えたような色を浮かべそしてだんだん大きく拡がってきた。私は、私の目にきつといつも蝶をちぎったりしたあとのあの輝きがあるに違いないと思った。彼は何か言おうとするように口を歪めた。私は彼が私に何か訊ねるに違いないと感じて漠然と、でも蝶を殺したあとの興奮をまだ湛えたままの明るい微笑を浮かべた。すると彼は、何かに突当りそうになった男が慌てて身を躲^かそうとでもするような表情と微かな身顫いをして、そして目を伏せると言った。

「私の家はこのすぐ向うですが、お茶でも召上っていきませんか。」

私はこの彼の切出し方がとても気に入った。《少年にとりいりたいのか？ それなら彼の前で当惑のさまを示せ》という言葉通り、彼はその当惑した表情と、十七歳の私を前にしてのひどく鄭重な言葉づかいによって私をすっかり惹き入れたのだった。そしてその上、五月の朝の少しひんやりとした空気。ちょっと妙だけれどとにかく上品で立派な紳士。私の軽やかな身装^{みなり}と新らしいレコードと詩集。そして熱いお茶の誘惑。私は陽気に頬笑みながら彼のあとについていくことに決めたのだった。

じっと目を伏せて何か考え続けている男と歩きながら、私はその若さからの傲慢さと持前の残忍さから、私が殺したのが醜い蛙や蠅ではなくて、美しい大きなアゲハチョウだったことを思い

出して愉快になっていった。この男は年老いたロマンチックな博愛主義者で、私にお茶を飲ませて美しい音楽でも聴かせながら、私のいけなかつたことを静かな言葉で諭そうとでもするのではないか。なんて滑稽な……。

でも私は、彼が私の顔を窺った時のあの異常な目の輝きとあの興奮したような大きな息づかいを思い出した。そして私はふと思いついた。そうだ。あれは私の何よりも大事な叔母が、私が蝶を虐殺するのを見つめる時の美しく激しい様子にどこか似ていはしなかったか。勿論彼女のあの無邪気で嬉しそうな表情とは明らかに違って、男の表情にはもっと深い翳が複雑に浮かび上ってはいたようだけれど。そうだ。もしかするとこの男は、蝶をつかまえた私がそれをちぎるのを実は期待していて、私に意外な共犯者の血を見つけたのかも知れない。でも、もしそうだとすると、結局どういふことになるのだろうか。

私は男の顔を横目で窺った。よく手入れの行届いた白く光った皮膚と彫りの深い知的な顔立。そしてどこか、精神病者を見たことのない私の想像の中に現れる魅力ある精神病者を思わせる、繊細で知的で異様に深い眼差し。弱々しそうな薄い胸と細く長い指。

反射的に私は彼の傍を並んで歩いていく私の様子を思い浮かべ、ラバーソールの軽い靴で湿ったベージュメントを踏みしめていくこの若くてしなやかで軽快な私に誇りに充ちた会釈を送った。私はレコードと詩集を持替えると、一層軽やかに陽気に歩いていった。

その男、石の門柱に掲げられた標札によれば野沢氏の家は、余り大きくはないけれど、古い、苔と蔦に濃く蔽われた、そして高い棕櫚の木、沢山植えられた静かな落着いた石の邸だった。

彼は一人で住んでゐるらしい。

私が彼のあとから黒い重そうな扉の中へ足を踏入れた時、私は異様な空気を感じて立竦んだ。

重い夏の花々で埋った温室のように、異常に美しく濃い花々の香りが家の中に充ちていたからだった。独り住いの四十男と、その家中に息塞る程充ちた花の香り……。これが十七歳の私の心を、好奇心で一杯の私の心を惹かぬ筈はなかった。何か素晴らしい理由や冒険や夢がなければならぬ。でもその期待と同時に、あの四十男の押しつけがましい若き日の恋や野心の物語をたづねり聞かされそうだといういまいましい私も私を襲った。いつもそんな時私は、曖昧な相槌と微笑を繰返しながら逃げ出す口実ばかり見つけようとしてしまう。いつそのうち逃げ出してしまおうか。

彼は私を客間らしい落着いた茶色の部屋に招き入れ、椅子とクッションを勧めながら手際よくお茶の用意を始めた。私はなんとなく手持無沙汰に手や足の先のスリッパを動かしながら無遠慮に部屋の中を見廻した。こんなに素晴らしい五月の朝だというのに、古めかしい小さな窓はしっか

りと閉じられていて、部屋には洪い調度とあちこちに置かれた沢山の花が妙に落着かない重々しい雰囲気を醸し出していた。私は壁をぐるりと眺め廻し、見事に磨き上げられた三挺の猟銃に目を留めた。私は何か言わなくてはいけないように思つて陽気に言つた。

「素晴らしい銃ですね。猟をなさるのですか？」

だが上品な男はぼんやりと何か膜でも透して見るような表情で私を振返つた。私は何か馬鹿氣たことを言つたように思つて慌ててつけ加えた。

「僕も時々父のあとにくつついて行くものですから……」

彼は顔を歪めるようにして微かに笑つた。私は肩をすぼめて、もう何も言わずに仔山羊のようにおとなしくしていようと決めた。私は重々しい石の暖炉の傍の小さなテーブルの上でお茶を入れてゐる彼の瘦せた肩を見ながら、彼がその肩にずっしりと重い銃をのせて独りで深い山に分け入る姿を思い浮かべ少し氣の毒に思つたりした。

やがて熱い紅茶が入つてレモンが切られた。男は目を伏せたまま私に勧めると、私の向い側の長椅子に腰を下した。私はそつとレモンの輪切りを紅茶の中に滑りこませ、紅茶の色が次第に薄くなつていくのを眺めながら、いよいよ彼は何か訊ねるのだろうと思つた。

男は顔をあげてその熱っぽい目を私に向けるとかすれた声で訊ねた。

「あなたは、もしかしたら、××××さんを御存じではありませんか？」

私は少しびっくりしながら、でもゆっくりと誇らしやかに答えた。

「僕の叔母です。」

そして私は急に訝しく思つて訊ねた。

「どうしてお分りですか？」

「蝶を殺したあとのあなたの目は、あのひとにそっくりです……」

男はその言葉を、その細い長い指先を顫えるように組合せようとしながら悲しそうに呟いた。

私はそんな彼の様子にふと私よりもうぶで単純な少年の魂を見つけたように思った。そしてそれと同時に、それ迄私を小さく押し潰していた彼の上品で落着いた物腰やこの客間の渋い重々しさなどが、逆に彼には不釣合なものに感じられて、私をのびのびと寛がせた。

そうだ、この四十男にふさわしいのはおそらく何よりもこの家に充ちた堪らない花の香りなのだ。私は急におかしくなつて頬笑んだ。そうだ。それにもしかしたら彼は私の何よりも大事なあの美しい叔母に失恋したのかも知れない。私はこの考えが全てをうまく説明するように思つて誇りに胸をふくらませた。それなら退屈な失恋の物語も素晴らしいものになる。ああ私の叔母はなんて素敵なのだろう。

私はすっかり得意になつて、促すような微笑を浮かべながら、おとなしく、でも抜目なく彼の

話を聴こうと決心した。

彼は叔母の小さい頃からの友達の一人だった。この、生まれた時から心臓病などを持ち読書を楽しむ神などを信じている内気で純粋な少年は、美しくて気紛れで優しく活気に溢れた彼女を心から愛したのだった。だが、叔母の全てを愛し受入れた彼にもただ一つだけどうしても許せないことがあった。彼女のあの素晴らしい残酷さである。

叔母は小さい時から蝶をつかまえてはちぎっていたのだ。食べてしまいたいように可愛らしい頬笑みを浮かべ大きな目を輝かせながら。

そして彼の言う破局は、彼が十八歳の時やって来た。

彼は或る初夏の夕方、彼女を散歩に誘い出すことに成功した。そしてあの公園に行って坐り心地のよい木蔭の草叢を見つけた。彼は熱心に詩や絵画や神について語り、彼女は長い柔らかな髪の毛の先を指でいじくったり空を眺めたりしていた。

その時だった、直ぐ傍の苔むした木の根元で仔猫が鳴き出したのは。それは生まれたばかりの痩せた黒い捨て猫で、その醜惡で卑屈な鳴き声は少年さえも戦かせた。

そして叔母は高く叫んだ。

「あら、早く殺して。」

でもこの気の優しい純粹な少年にどうしてこの痛ましい生物いさまろを殺したり出来よう。

すると興奮した少女はさつと髪を後へはねあげて立上ると、駆寄ってその仔猫をつかみあげた。そして、この世のものとも思われない天使のような微笑を浮かべて少年を見つめながら、仔猫を木の根元に叩きつけた。

彼女はそしてその大きな目をキラキラと輝かせて少年を見つめた。

少年は思わず立上ると少女に駆寄り、その柔らかい肩をつかんで強く揺すぶった。

「あなたはなんとということをするんだ……」

彼は少女を抱き締めて泣き出した。彼女はまだ大きく息をしながら、その美しく上気した顔を上げて彼を眺めた。そして頬笑んだ。彼は泣きながら駆出した。

彼は話しながらすっかり興奮してしまつて終りには涙さえ浮かべていた。四十歳の彼と十七歳の私は、その本来の立場をすっかり取替えてしまつて、私は静かに優しく聴いていた。

「あのひとは、今でも蝶をちぎっているのでしょうか？」

話し終つて暫くしてから男は濡れた目を上げて私に訊ねた。